2023阪神淡路大震災記念行事

司祭　イサク　坪井　智

神戸聖ヨハネ教会は阪神淡路大震災復興記念聖堂の名前を持ち、震災を記憶にとどめ次の災害のため教訓を伝える役目を担っています。震災から28年目に当たる２０２３年も、１月17日を中心にいくつかのイベントをさせて頂きました。

15日は、主日礼拝後、教会員有志による「ＹＯＳＥＮＡＢＥ（寄せ鍋）コンサート・小盛り」を３年ぶりに開催することができました。このコンサートは、震災の事を忘れない、という信徒の思いから始まったもので、コロナ禍前は、教会員のみならず教会外の多数の演奏者を招いて共に歌い演奏しつつ、震災のことを心に刻む時となっていました。コロナ禍の中コンサートを収録しオンライン配信という形になっていましたが、今年は小さいながらも対面で行う事ができました。

17日は、早朝の発生時の祈りから始まり、10時30分の追悼記念聖餐式、その間に関係学校での追悼礼拝など、神戸の地は、朝から夜まで震災犠牲者を悼み、教訓を確認し、震災により出会った者同士が再会する時となりました。追悼記念聖餐式では、瀬山会治司祭が説教をしてくださいました。先生は東日本大震災や九州熊本地震、西日本豪雨などで現地ヴォランティアコーデネーターとして働かれました。その活動の原点が阪神淡路大震災であったこと、それも28年前北関東教区に出向していて何もできなかった事が、その後の活動を行う力になったと証ししてくださいました。そして様々な災害を通して感じたことは、誰でも何か出来る事がある、誰でもヴォランティア活動ができるという事であり、教会のヴォランティア活動の素晴らしさは、根底に苦しむ者への熱い祈りがある事だ、と語ってくださいました。

コロナ禍でできなかった追悼行事が、今年は多くの場所で再開されていました。そしていつもにも増して多くの方々が集まり祈りを献げていました。また、若い者、震災を知らない人たちが熱心に体験談を聞いている姿も見ることが出来ました。震災もコロナ禍も人と人とが分断され、交わりが絶たれたことにより大きな苦しみや悲しみを与える出来事でした。だからこそ、３年ぶりの追悼行事に大勢の人が集まったのも、人と人との繋がりの大切さを互いに実感したかったからではないかと思います。

南海トラフ地震や東南海地震、また毎年起こる豪雨による災害など、いつでも、誰もが大きな災害に遭遇する可能性があります。だからこそ震災で気づいたことや教訓をしっかり伝え、来るべき大きな災害に備えたい、人と人との繋がりを大切にする教会になりたいと願っています。

（神戸聖ヨハネ教会牧師）